

帝京大学経済学部地域経済学科

地域で活躍する卒業生

目次

- 地域で活躍する卒業生シリーズについて 学科長 玉 真之介 P 1
- 〔No.1〕 野球部長として母校を16年ぶりの甲子園へ
第6期生 瀧田 湧さん P 2
- 〔No.2〕 地域を引っ張るリーダーをめざして！
第2期生 橋本 賢太さん P 6
- 〔No.3〕 地域課題の解決のために企画力で勝負する！
第5期生 関谷 奏和さん P 9
- 〔No.4〕 チャレンジ精神で社会への貢献と一歩上を目指して！ P12
第8期生 大塚 裕太さん
- 学修ポートフォリオを活用しよう！ P16

地域で活躍する卒業生シリーズについて

帝京大学経済学部地域経済学科

学科長 玉 真之介



帝京大学経済学部地域経済学科は、東日本大震災の年の2011年4月に、経済学部の4番目の学科として開設されました。開設の趣旨は、言うまでもなく、東京一極集中と地方の衰退が進む日本の経済・社会の流れを少しでも変えるために、地域の活性化に貢献できる人材を育成することです。本学科が経済学部の他の学科がある東京都八王子市ではなく、理工学部ある栃木県宇都宮市に設置された理由も、この開設の趣旨にあります。

この趣旨に合わせて本学科は、経済だけではなく、行政や産業についても学べる教育カリキュラム、さらに少人数教育とフィールドワークを目玉として人材育成に取り組み、はや10年以上が過ぎました。この間、2015年に第1期生を社会に送り出し、その後毎年、高い就職率を維持し、2024年3月には第10期生を社会に送り出しました。

そのような節目を踏えて、本学科では受験生や在学生にとってロール・モデルとなるような、地域で活躍する卒業生から話を聞くことにしました。この小冊子は、2023年から2024年においておこなったインタビューをまとめたものです。この冊子に収録した4名の卒業生は、いずれも本学科の開設の趣旨を体現した人材として、地域で活躍しています。

私たちは、この4名のような卒業生を社会に送り出せたことを誇りに思います。本学科の在学生のみなさん、本学科への受験を目指すみなさん、こうした先輩から良い刺激をもらって、自らの学びの充実やライフデザインに活かしてください。

野球部長として母校を16年ぶりの甲子園へ

2020年3月卒業：地域経済学科第6期生

文星芸大附属高等学校教諭

瀧田 湧 さん

聞き手：玉真之介（学科長）・古家正暢（教職担当教員）



1 現在の仕事、やりがい

学科長：この度は、甲子園出場おめでとうございます。

瀧田：ありがとうございます。16年ぶり11回目の出場となりました。

学科長：16年ぶりはすごい。でも、すでに11回目なのですね。

瀧田：ええ、前身の宇都宮学園から通算で11回目になります。

学科長：歴史ある学校なんですね。戦前からの。

瀧田：そうです。創立百年以上になります。

学科長：それでは、現在の教員としての仕事と野球部長としての仕事についてご紹介ください。

瀧田：まず、教員の方から。いまは2年生の担任をしています。今年で4年目になりますが、4年連続で担任をさせてもらっています。教科としては、地歴・公民、それに地理Aとか世界史探究とか、歴史総合とか、いろんな教科を担当しています。

学科長：なかなか大変ですね。教員になる前に想像していたことと違いはありますか。

瀧田：想像して以上に、教師の仕事が多いことですかね。様々なところに気を配っておく必要がありますね、生徒も様々ですから。その中でも、卒業したとき、進級したときに、「先生のおかげで卒業できました、進級できました」とか言われるので、そこにやりがいを感じますね。最初の年が3年生の担任で、1年間だけでしたが、卒業の時は、グッとくるものがありました。

学科長：野球部との関わりも1年目から？

瀧田：そうですね。最初はコーチとして、途中から部長として、今年が2年目になります。

学科長：こんな若い部長は珍しいでしょう。

瀧田：はい、県内では一番若いです。甲子園に行ったときも、自分が一番若いだろうと思って、これは取材されるかなと思っていたら、まさか自分より若い人が居て、残念ながらでした。

学科長：それは惜しかった。ところで、瀧田さんは、野球はいつから？

瀧田：小学校2年生ですかね。学童野球で、父親がコーチだったので。中学校はクラブチームで、高校は文星に進んで、3年間やって燃え尽きたって感じです。最後の夏は作新に負

けていたので、何とかリベンジしたかったのですが、昨年の秋も、今年の春も作新に負けていたので、今回が3度目の正直で勝つことが出来ました。

学科長：16年ぶりは凄いね。栃木と言えば作新って感じでしたものね。そうとう反響が大きかったのではないですか。

瀧田：8年連続、作新でしたから。OBを中心に、多くの方から祝電や寄付、現地での応援をいただきました。反響は大きかったです。

学科長：部員数は何人くらい居るのですか。

瀧田：90名です。いま3年生が抜けて62人かな。県内では一番部員数が多いです。

学科長：そんなにたくさん。それじゃあ、レギュラーになれない部員も多いから、大変だよな。

瀧田：そうです。でも、メンバー外がしっかりしているチームほど強いと思うので、メンバー外が腐っちゃうと、メンバーにも影響するし、いまの3年生は、チームのために、メンバーのために、という意識がメンバー外に強かったので、そこが甲子園につながったと思います。

学科長：チームをそういう方向に持っていくのはどうしているのですか。

瀧田：今年は居なかったのですが、これまでなげやりになる生徒もいたので、その時は2人で話し合ったりします。その子、その子で、良いところもあり、悪いところもあるので、やはり良いところを褒めてあげるとかします。やはり、今は褒めて伸びるのかなと思っていて、怒るとシュンとなっちゃう子が多いので、できるだけ褒めて、でも悪いところはしっかり叱って、というようにやってます。

2 大学での学びで役立っていること

学科長：そんな中で、地域経済学科での4年間の学びで役立っていることはありますか。

瀧田：途中から古家先生がいらして、それ以前はPCを使うことが少なかったのですが、古家先生にスライドを使って授業を作ることを教わって、それで教育実習の時にもパワーポイントを使って実際に授業をしましたし、いまでもスライドを使う授業をしています。それが今でも役立っていますし、古家先生に学んで良かったと思っています。

学科長：ゼミはどこに所属していたのですか。

瀧田：はじめは、松尾先生、そのあと内貴先生でした。やはりそこでは、古家先生もそうでしたけど、地域のために自分が出来ることは何か考えることを学んで、その延長線上で、広島の高雨災害支援のボランティアに参加させてもらって、そのことが現在でも授業の中でその体験を話したりできるので、ほんとに良かったと思っています。

学科長：あの広島の高雨災害ね。広島はでも遠いよね。1人で？

瀧田：いや同級生の清岡君と2人で行きました。呉市ですね。土砂が家の中まで堆積していて、それをバケツリレーで外に出す作業しました。それが貴重な経験になっています。

3 学生時代の思い出

学科長：ほかに学生時代の思い出は何かありますか。

瀧田：松尾先生のゼミで、金沢に観光というか、いえ、学びに行きまして、金沢は初めて行ったところなので、すごく印象に残っています。

学科長：そう、松尾先生はけっこう遠いところへフィールドワークに行きますからね。

瀧田：ええ、そこで空間の使い方とか、いろいろ学びましたね。

学科長：そういうゼミでの学びは、いまの授業でも役立っていますか？

瀧田：もちろんです。体験談を踏まえるというのが、説得力にもなりますし、なにより“食いつきがいい”ですね。ですので、できる限り、授業で使うようにしています。

学科長：学生時代に野球は？

瀧田：学生時代は、部に所属してはなくて、昔の仲間と草野球でしたね。

学科長：そうでしたか。この地域経済学科を選んだのはどうして？

瀧田：ええ、小さい頃から歴史が好きで、特に戦国時代が好きで、なので社会の先生になれるというのが、選んだ理由の1つでしたし、あと担任の先生が帝京大学出身と言うこともあって薦めて頂いて、オープンキャンパスにも来て、キャンパスの雰囲気も良いし、「地域」というのも自分に合ってるなと思い、この学科に入学しました。

学科長：奥様とはいつどこで（笑）？

瀧田：えーと、卒業後ですね。籍を入れたのは。彼女は、佐野短期大学なんですよ。野球つながりで、彼女も別的高校なんですけど、野球部のマネージャーをやっていたので。学生時代に付き合いがあって、卒業後すぐに結婚しました。彼女も福祉系で働いていて、2人とも忙しくて2人の時間がちょっと少ないのが悩みといえば悩みです。

4 後輩への助言、これからの夢

学科長：いまの仕事は結果も出ているし、充実しているよね。

瀧田：そうです。やりがいもあるし、充実していると思います。

学科長：どうですか。後輩や、これからこの学科に入学してくる人に対して、何か助言はないですか？

瀧田：はい、地域経済学科の先生は、1人1人丁寧に見てくれて、サポートしてくれると思うので、本当にそこがいいところだなと思いますし、自分も教師になりたいという目標をもって入学させてもらって、途中、違う道に進んでしまいますかも知れないという時もあったんですけど、自分の意志を強く持つことが出来れば、夢を実現することができると思います。自分の夢を叶える環境というのは、地域経済学科に備わっていると思うので、自分も3年生の担任になったときに、県内の大学に行きたいという生徒には薦めようかなあと思っています。そのくらい、お世話になったので。

古家：内貴先生の話をしなにと。

瀧田：実は内貴先生に消防署を薦められて、その気になったのですが、両親と話す中で、

やはり最初の目標の教師を目指すことにしました。もう消防の方は決まりかけていたので、内貴先生には申し訳なかったのですが、卒業の時に、内貴先生に「フレー。フレー」ってエールを贈ってもらえたのが今でも強い印象として残っています。

学科長：今後のプランとかありますか。

瀧田：すぐに秋季大会がはじまるので、特に関東大会が栃木県開催なので、そこで結果を出せば選抜甲子園にもつながるので、まずは2期連続の甲子園を目指してチーム一丸やっていきたいですね。さらに、夏の甲子園2年連続出場できるチームを作れるように頑張っていきたいと思います。

学科長：もうちょっと先のことで何かありますか。

瀧田：やはり、いまは野球部長として重要な役割を担っているのですが、将来は監督として甲子園に行きたいというのが夢ですかね。文星はOBしか監督になれないので、一応、その資格はあるので、もし任せてもらえれば、自分の色のチームを作っていきたいですね。

古家：瀧田君の色とはどんな色なのかな？

瀧田：先ほども言ったように、褒めて選手を伸ばして、締めるところはしっかり締めて、そんな感じですかね。選手の長所を最大限に活かすようなチーム作りをしていければ、良いかなと思っています。

学科長：なるほど、その夢が近い将来叶うことを私たちも祈っています。今日は、ありがとうございました。



古家先生と瀧田さん

地域を引っ張るリーダーを目指して！

2016年3月卒業：地域経済学科第2期生
関東自動車株式会社 路線バス部
橋本 賢太 さん



聞き手：玉真之介（学科長）・乗川聡（指導教員）

1 現在の仕事、やりがい

学科長：お忙しい中、ご協力ありがとうございます。

橋本：いいえ、とても光栄です。

学科長：橋本さんは、何年の卒業になりますか。

橋本：2016年で第2期生になります。卒業して、ずいぶん、経ちました。早いですね。

学科長：現在のお仕事をご紹介いただけますか。

橋本：今、関東自動車の路線バス部に所属しています。路線バス全般に携わる仕事をしております。主にダイヤを作ったり、お知らせなどの掲示物を作ったりしています。

学科長：ご出身はどちらですか。

橋本：栃木県の大田原市です。

学科長：関東自動車を目指された理由はありますか。

橋本：もともと小さい頃から乗り物が好きで、乗り物に直接関わる仕事がしたいと思っていました。関東自動車ですと、通学するときに使っていましたし、地域に密着している会社なので、入ろうと思いました。

学科長：なるほど、お仕事の内容も少し伺いましたが、今の仕事の「やりがい」はどんなところにありますか。

橋本：お客様に直接関わる仕事ですので、そこにやりがいがありますし、先ほど申し上げたようにダイヤを作っていますが、限られた車両とか人員とかの中で、自分の思うとおりのダイヤが出来たときはすごくうれしいですし、やりがいを感じますね。

2 大学での学びで役立っていること

学科長：そういうお仕事の中で、学生時代に学んだことで役に立っていることはありますか。

橋本：乗川先生の授業が一番役に立ったかなと思います。レポートを書くのが主の授業でしたから、就職して社会人になってからは文章を書くことがすごく多くて、大学の時にいろいろレポートを書いたのが今、役に立っていますね。

乗川：彼の文章力はもともとすごくて、他の人がA4で2、3枚のところを、橋本さんは10

枚以上書いてきてました。

学科長：ゼミは乗川先生以外には？

橋本：はい、最初が乗川ゼミで、3年生の時に溝尾ゼミになって、4年生の時は溝尾先生が退職となって山川ゼミでした。卒論は山川先生でした。

3 学生時代の思い出

学科長：学生時代の思い出で、印象に残っていることはありますか。

橋本：私は授業よりは、サークル活動に力を入れていたので、印象というところですね。

学科長：どんなサークル？

橋本：「まちづくり研究会」というサークルで、テーマを決めて調査をしたり、研究をしたりして、それを基に学外の発表会で発表するとかの活動をしていました。

乗川：顧問が溝口先生でしたよね。

橋本：そうです。溝口先生に文章の添削とかしていただいたりしました。

学科長：どんなテーマに取り組んだのですか。

橋本：まさしく路線バスの研究をやりまして、それが今につながっているような感じですね。

学科長：その時に関東自動車に調査に行ったりしたのですか。

橋本：はい、何回か意見交換会をやりました。

学科長：そうすると、就職活動にもなっていたのですね（笑）。

橋本：そうですね。ただ、最初は都内の会社に就職しようかと迷ったのですが、やはり地元
の関東自動車に就職することにしました。

学科長：かなり充実した学生時代だったですね。

橋本：そうですね。頑張ったかなと思います。

学科長：学外の発表会とはどんな会ですか。

橋本：1つは大学コンソーシアムとちぎの発表会で、こちらでは賞をいただきました。もう一つは宇都宮市のもので、こちらは賞にはいかなかったのですが、意外と好評でした。路線バスという身近なテーマだったので。

4 後輩への助言

学科長：路線バスは、今、人口減少とか高齢化とかで、なかなか運営が大変と言いますよね。

橋本：うちも例外では無くて、運転手が足りていない状態で、来年2024年問題といって、運転士の拘束時間が短くなるので、このままだと基準の時間を越えてしまう可能性があり、現在のダイヤで運行できなくなるかもしれません。厳しいですね。

学科長：それに対してどんな対策を考えているのですか。

橋本：ここまできると減便せざるをえないのかなと思っていますが、減便するにしても、お客様に極力迷惑が掛からないダイヤを引いていきたいと考えています。

乗川：乗客数はどうなんですか。

橋本：乗客数はだんだん増えています。コロナの時の2020年が底で3、4割くらい減ったのですが、いま戻ってきていて、コロナ前の1割から1.5割減くらいまで回復しています。このまま増えていくのではないかと考えています。

学科長：L R Tの影響はどのようなのですか。

橋本：駅東側の路線は大規模に再編しました。そこは影響があったのですが、今は共存共栄の時代なので、L R Tとも上手く連携しながらやっていくのが一番ですね。

学科長：後輩への助言は何かありますか。

乗川：橋本さんは林田先生の授業にゲストスピーカーで来ているので、後輩とも触れ合っていますよね。

橋本：そうなんです。今年も10月の下旬に。

学科長：どうですか。後輩たちは。

橋本：学生たちを見ると、あの時に戻りたいと強く思いますね。やはり、学生のうちにいろいろなことを経験してほしいなと思います。勉強はもちろんなんですけど、とことん遊んでほしいなとも思いますね。

5 将来の計画

乗川：橋本君は同窓会の会長ですから。

学科長：そうでしたね。今後、同窓会を少し動かそうと思っているので、よろしくお願いします。橋本さん自身の将来の計画というか、何か考えていることはありますか。

橋本：漠然としているのですが、地域のリーダーというか、地域の活性化に向けて引っ張っていきような人になりたいと思っています。

乗川：それは宇都宮、それとも大田原市。

橋本：大田原市です。やはり生まれ育った町を元気にしたいと思いますね。

学科長：もう少し具体的に言うと。

橋本：市議会議員とかにもなりたいかかと、何年後になるかわからないのですが。

学科長：それはすごい。

橋本：今の仕事にも魅力は感じているのですが、実家が大田原市で電器屋をやっているのので、いずれ実家を継いで、経営しながら地域を活性化する仕事もやっていこうかと。

学科長：ぜひ頑張ってくださいね。

橋本：折角、地域経済学科に入学して卒業できたので、やっぱり最終的には地域の活性化に貢献したいなと思っていますね。

乗川：橋本さんがそんな風に考えているとは思いませんでした。頼もしいですね。

学科長：ほんと頼もしいです。その計画は必ず実現できると思います。私たちも応援しています。



橋本君と乗川先生

地域課題の解決のために企画力で勝負する！

2019年3月卒業：地域経済学科第5期生

国土交通省 北陸地方整備局（新潟市役所から出向中）

関谷 奏和 さん



聞き手：玉真之介（学科長）・乗川聡（指導教員）

1 現在の仕事、やりがい

学科長：今日はありがとうございます。少しお話聞かせてください。

関谷：私で良いのでしょうか、と思うのですが。

学科長：いや、関谷さんは本学科から県庁所在地都市の公務員に採用された第1号で、その後は宇都宮市役所ははじめ毎年、うちの学科から公務員採用者が続いていますから。公務員就職のパイオニアとして話を聞かせてください。ところで、関谷さんは、何年の卒業になりますか。

関谷：平成31年ですから、2019年3月になります。卒業して今年が5年目ですかね。

学科長：現在のお仕事の概要を教えてください。

関谷：今は国に出向して、用地の買収をしています。もともとは新潟市役所に行政職として就職して、4年間はイベントだったりとか、地域課題を解決するために、企画をしたりしていました。一カ所目の所属は東区役所の地域課というところで何でもやる課でした。

学科長：それは、希望を出して配属されたのですか？

関谷：いえ、企画できるところ行きたいといったら、たまたま何でもやる場所へ配属されました。

学科長：それはたいへんそうですが、やりがいとか、面白さとか、ありますか。

関谷：そうですね、企画が出来るので、それで人が喜んでいるところを見ることができると、逆に裏方の目に見えないところもどっちも経験できるのが良いですね。

学科長：その中で、一番印象に残っている仕事ってありますか。

関谷：実は、今年の2月くらいに、「自治会の後継者不足」という新潟だけではなく、全国どこでも深刻な課題を担当することになってしまっただけでなく、よくやるチラシとか配っても残らないし、それで回覧板にその問題を書いて回してください、全世帯に回したら、すごい反響があって、それが一番達成感のあった仕事かな、と思います。見本を持ってくれば良かったんですけど。

学科長：自ら企画したことが多くの人に受けとめられたわけだから、それはいいですね。

2 大学での学びで役立っていること

学科長：関谷さんは、大学入学したときから公務員を目指していたのですか。

関谷：まず、新潟に戻って新潟で仕事がしたいというのが一番。そう考えると、親も公務員なので、市役所で働くのがワーク・ライフバランスからもいいのかなと思って。

学科長：若いときはどうしてもね。でも、公務員試験となると特別の勉強が必要じゃないですか。学生時代はどうしていたのですか。

関谷：それは、乗川先生とか内貴先生とか、他の先生にも、公務員になりたいんですけど、どんな勉強をしたらいいですか、と聞いて、いろんな方面からアドバイスをいただいて、自分の中でその意志を固めていきました。この学科は自由度があって、公務員対策の勉強をする時間もとれたと思います。

乗川：確かに関谷君の場合は、その場にあるいろんなものを自分から利用して、主体的に学んでいたのも、その姿勢を身につけたことが今の仕事にも役立っているのじゃないかな。

関谷：はい、とにかく先生達からいろんな話を聞いたのが、よかったと思います。さっきも内貴先生と話していて、やはりプロフェッショナルなんで、本当に役立つ話をいっぱいしてもらいました。

学科長：卒業後も内貴先生とは連絡取っていたの？

関谷：いえ、連絡してなかったんですけど、絶対、節目では連絡しようと思っていて、今回、結婚したので、ようやくご挨拶に来ることができました。



関谷君と内貴先生

3 学生時代の思い出

学科長：学生時代の思い出で、印象に残っていることはありますか。なんか野球をやったとか。

関谷：あのグラウンドで、遊びで少しやってましたけど、学生時代は勉強でしたね。

学科長：ゼミとかの思い出はなにか。確か、2年生が乗川ゼミ、3年、4年が内貴ゼミでしたね。

関谷：内貴先生には栃木県議会とかにつれてってもらいました。乗川先生には東京へつれてってもらって、両国国技館とか江戸博物館とかへ行行って、その後に死ぬほど美味しい焼き鳥を食べさせてもらいました。

乗川：そうだったっけ。僕は関谷君の記憶は、とにかく勉強していたという印象ですね。良い成績を取るんだという。確か成績は1番を通したんだよね。

関谷：ええ、まあ。ちょっと私は入試で失敗して落ち込んでしまってた、絶対失敗しないと思っていて、さっき乗川先生にもギラギラしてたと言われたんですけど。でも結果的にこ

こに入って本当に良かったと思いました。

学科長：そう言ってもらえるとありがたいんだけど、勉強一筋みたいな学生時代？

関谷：そういうわけでもなくて、お酒飲めないんですけど、飲み会は好きで友達とよくいつてたし、そうだ、みんなでボーリングによく行っていました。

4 後輩への助言

学科長：自分の学生時代を踏まえて、後輩になにかアドバイスはありますか。

関谷：とにかく先生達といっぱいコミュニケーションを取ってほしいですね。友達とかも大事だけど、すごい先生がいっぱいいるから、恵まれた環境にいることをまず知ってほしいですね。他の大学と違って、先生との距離が近いと思うので。

学科長：そうなんです。そこがこの学科の特徴なんです。

関谷：それを最大限に活かしてほしいと思いますね。研究室の前に行列が出来るくらい。その時にはよくわかんない話をされたとしても、絶対あとあと役立つと思いますから。

学科長：確かに、最近、学生がちょっとおとなしいというか、控え目なので、在学生に伝えておきますよ。

乗川：関谷君は、さっきも言ったけど、ずば抜けていましたけど、それに見合うだけの努力を自分から積極的にやっていましたよね。そこがすごいと思います。

5 将来の計画

学科長：今後、何かやりたいことはありますか。いまは国に出向して視野が広がって、でも役所だから当然、いろいろな部署を回りながら、いろいろ体験をして、上にあがっていくという組織だから、そういう点で何かプランを持っていますか。

関谷：ずっと言ってるんですが、新潟ってすごく楽しくて良いところなんですけど、やはり栃木も同じですが、その魅力が伝わっていないので、その魅力を押し出していきたいと思うんです。特に、食べることが大好きなので、新潟の食を押し出していきたいと思っています。

乗川：すでに有名ではあるけど、もっと知ってほしいということね。

関谷：採用面接の時も、そればかり言っていました。「新潟は本当に食べ物が美味しいんです」って。まだ、そういう部署で仕事はしていないんですけど、出向から戻ったら、ぜひ食べ物押しの仕事がしてみたいですね。

学科長：それは絶対いいですね。お米やお酒も美味しいしね。

関谷：お刺身とか、海産物も美味しいんですよ。

学科長：確かに、海も山もあるから。なるほど、分かりました。食を通して、新潟の魅力を伝えて、新潟をもっと活力ある町にしたいということですね。それは良いと思います。私達も応援していますので、頑張ってください。

関谷：ありがとうございます。伴侶も出来ましたので、これまで以上に頑張りたいと思います。

チャレンジ精神で会社への貢献と一步上を目指して！

2022年3月卒業：地域経済学科第8期生

ジャパンギャランティサービス(JGS) 横浜支店営業部
大塚 裕太 さん



聞き手：玉真之介（学科長）・五艘みどり（指導教員）

1 現在の仕事、やりがい

学科長：今日はありがとうございます。早速なのですが、現在のお仕事を教えてください。

大塚：私は今、建設業界のお客様に、複合機や大判プリンターなどの印刷機器、クラウドカメラ、デジタルサイネージのような建設業界に特化した商材をレンタルでご提供をしている会社で営業をさせていただいております。

学科長：なるほど、では様々な会社に訪問してセールスしたりするのですか。

大塚：そうですね。現場着工前の打ち合わせから納品、工事期間中の定期訪問、竣工時のご挨拶と始まりから終わりまですべてに携わらせていただいております。建設業界では、モノによっては購入してしまうと次の現場へ持って行く移動コストがかかってしまうので、弊社のような『レンタル』といった形態が合っているという性質があります。社内には機器の整備をする部署や請求担当、手配担当など様々な部署がありますが、営業はお客様からのお問い合わせを窓口として受ける部署でもあります。売り上げや実績だけでなく、お客様との関りを築きながら働ける営業職という職種に惹かれて選びました。

学科長：出身が横浜ということで、地元の会社を選ばれたのですか。

大塚：いえ、最初は宇都宮で就職するつもりだったのですが、夏頃に就活が一段落した段階で、あまり納得が出来なくて、地元と宇都宮と両方の会社を比較して、結果的に地元でよい企業が見つかったということです。

学科長：そうでしたか。今の仕事の“やりがい”はどんなところにあるのですか。

大塚：昨今、業界に関わらず世間でも“紙からデジタルへ”という流れがありますが、まだまだ紙での印刷物が必要な建設業界でも徐々にiPadを使って図面の管理をしたり、クラウド型のカメラを使って現場を遠方や外出先から管理することをしたりとデジタルの需要が増えつつあります。何か営業するときに、1種類だけに特化するのは面白くないと思い、弊社であれば様々な商材を取り扱っているのが時代の波に応じた挑戦ができると思いました。自分としても臨機応変に営業活動が出来るところが自分に合っているし、“やりがい”も感じていて、前向きに働いていける気がします。

学科長：2022年4月の卒業ですから、勤めて2年が経過したところですね。この2年間で何か達成感が感じられたようなことはありましたか。

大塚：普通、入社して1ヵ月は研修で、1年間はOJTが一般的だと思うのですが、所属をしている横浜支店の事情もあって私は1ヵ月の研修後に5月からすぐに担当会社を持たせていただきました。同期が本格的に独り立ちをする2年目には、また新しいことに着手できると言った次から次へと新しいことをやれたことが楽しかったです。

学科長：それは、普通より早いということですね。

大塚：そうですね。今春の4月からは、新しく入社してくる新入社員の教育担当というまた、新しい役割をいただけることになっています。

学科長：それだけ、会社の中で評価されているということですね。

2 大学での学びで役立っていること

学科長：それでは、大学時代の4年間で今、役立ってるなと感じることがあれば、ぜひ教えて欲しいのですが。

大塚：地域経済学科は、ゼミが他大学より早かった気がしています。あれがよかったかな、と思います。大学の授業はだいたい何十人規模なので、リーダーシップを養うとかにはならないと思うのですが、2年生からゼミ長とか経験できるし、もちろん3年になってからも出来るので。

五艘：2年生は誰のゼミでしたっけ？

大塚：松尾先生です。

五艘：そうでした。松尾ゼミでもゼミ長で、私のゼミでもゼミ長でしたね。でも、コロナで動けない大変な年でしたよね。まだ慣れないオンラインで、とりまとめとかしてもらっていましたね。

学科長：そうだ、そうだ。コロナの時ですね。では、ゼミ長をしていても大変だったでしょう。苦労とかはありましたか。

大塚：2つのゼミとも活発な人が多くて、意見もたくさん出たのですが、その分、真反対の意見も出て、一方を採用すると、他方がやる気無くすんじゃないかと。そこで、みんながモチベーションを落とさないように、どう1年間取り組んでいくかが大変だったというか、良い経験になりましたね。

学科長：そうですね。高校時代からサークルのキャプテンをやったとか？

大塚：いえ、特には。大学では、映像制作部に入っていました。短編の映画を自分たちで製作・編集して、八王子キャンパスにあるコミュニティに出したり。趣味の延長線上ですけど。

学科長：コロナ禍の中でも、充実した学生時代だったようですね。

大塚：実は、私は2年入学が遅れているので、宇都宮で1



大塚君と五艘先生

人暮らしを始めたときに、絶対に4年間、積極的に活動しようと自分で決めていて、不安もあったんですが、どんなに怖かろうと、とりあえず1歩踏み出して傷ついたら撤退と思って、ゼミ長も最初はちょっと緊張したんですが、とにかくやってみる、課外活動もやってみる、とやった結果が経験値になって、自分なりの適性に気づけたと思います。

学科長：そのまま後輩への助言になっていますね。

3 学生時代の思い出

学科長：学生時代は、五艘ゼミで様々な活動に取り組んだと思いますが、何か印象に残っていることはありますか。

大塚：3年生の頃は、コロナで何も出来ない状況でした。

五艘：そう、雰囲気的にも沈んでしまいましたよね。

学科長：確かに、あの頃はキャンパスも学生が居なくて静かでした。

大塚：3年生のはじめに、インスタを使って足利市の観光振興をやろうとしていたのですが、どんどんコロナが酷くなって、調査に出かけるのも、自分たちも感染リスクがあるし、来られる側も敬遠があるし、計画していたことが出来なくて、あの頃が大変でした。

五艘：でも、現地には行ったんですよね。分散していけばいいだろうということで。ただ、今までは全員で行っていたのを分散していくので、班がたくさん出来て、その分、リーダーはとりまとめが大変になりましたよね。

大塚：ええ、積極的な人と消極的な人と半々くらい居たので、この両方を掛け合わせて班を作るのが大変でしたね。

学科長：それでも、ここにある「大学生がおすすめする足利のまち：たべあるきあしたび」というパンフレットをゼミで作ったたんですよね。よく出ていますよね

大塚：この中にある名草巖島神社にちょっと行ってみようかと友達と二人で、朝5時くらいに出発していったんですが、めっちゃ遠いところで、ネット検索でも出て来ないようなところで、でもここに行ったことで、足利をやる決めるきっかけになりました。

4 後輩への助言

学科長：他に思い出は何かありますか。

大塚：大学からは離れるのですが、宇都宮で1人暮らしをして、学費だけ親に出してもらって、生活費は自分で稼ぐということで、辛い思いもしながらバイトをたくさんしたことが思い出ですかね。でも、1人暮らしをすると、挑戦というか、自分で考える力が養えるのかなというか、今に生きてきているなと思います。

学科長：確かにそうですね。すでに、後輩への助言になっていますが、他に何か後輩への助言はありますか。今の学生たちは、高校時代にコロナの影響を受けた世代なので。

大塚：やっぱり、何事にも挑戦ですかね。コロナでやりたいこともやれなくて、少し抑え気味になっていると思います。そのまま押さえていると、またコロナみたいことが起きるか

もしれないし、それでなくても時間はどんどん経過していくので。意識して何かに一歩踏み出しておくことが、就職活動においても、社会に出てからも財産になっていくと思うので。何でもいいから挑戦してほしいと思います。

学科長：コロナの時代だからこそ、意識的なチャレンジが必要だということですね。

5 将来の計画

学科長：では最後になりますが、今後、何か挑戦していきたいことはありますか。今すぐでなくても、もう少し先の将来でもいいのですが。

大塚：早い段階で管理職というか、マネジメントを任せいただける職種につきたいという思いがあって。もともとゼミで、そういった仕事が好きだったので。ただまだ社会人2年目で、自分がやったことを上司に報告して、今後どうして行くか決めていくという役割なんですけど、そこから一歩上に出て、自分がこうしようとリードして会社に利益を生み出すような、先駆けになれるようになっていきたいなと思っています。

学科長：よい志だと思います。そのとっかかりとして何か考えていることありますか。

大塚：4月から教育担当になるので、まずはそれをしっかりやっていくことですかね。

五艘：3年目から教育担当というのは早いですね。

大塚：普通は4年目か5年目くらいからなので、早いと思います。でも、4年目や5年目の先輩と比べたら経験値で劣る部分があるので、そこをどう補うのかよく考えて、新人が早く独り立ち出来るように4月から頑張りたいと思います。

学科長：ぜひ頑張ってください。応援しています。

(了)

学修ポートフォリオを活用しよう！

そもそも「ポートフォリオ」ってなに？

ポートフォリオ（portfolio）は、『ジーニアス英和大辞典』によれば、元イタリア語で、「書類ばさみ」、「代表作品選集」、「有価証券明細表」といった意味とあります。

就活で使われるポートフォリオ

就活で企業から「ポートフォリオを提出してください」と言われることがあります。これは「あなたの実力や力量がわかる作品集」のことで、デザイナーやクリエイター職を目指す人は、求められることが少なくありません。

教育用語としてのポートフォリオ

大学教育における「学修ポートフォリオ」の理解には、PDCA サイクルという考え方が重要になります。これは元々、製品の品質改善や環境改善の方式として P(plan)、D(do)、C(check)、A(action)というサイクルを繰り返したものが、「自己啓発」の方法としても有効と考えられて、教育現場に取り入れられるようになりました。

目指すのは自律的な学修（＝自ら目標を定める学修管理）

みなさんは、大リーグの大谷翔平選手がマンダラチャートという目標達成シートを作っていたことを知っていますか。大切なのは、自ら目標を立てること、そして、それに向かって努力し、それを自ら振り返ることです。それが自律的な学修です。

充実した大学での学びのために

大学教育は、高校までと違い、学生が自ら選択・決定することを基本としています。それなので、大学での学びが充実したものとなるかどうかは、自律的な学修ができるかどうかにかかっています。

学修ポートフォリオを活用しよう！

学修ポートフォリオは、みなさんの自律的な学修をサポートするシステムです。難しく考えることはありません。まずは、各学期に取り組みたい目標を 1 つ決めて、それができたかどうかを振り返ってみましょう。

社会人になってからも役立つ

学修ポートフォリオを活用した自律的な学修の習慣は、大学での学びの充実だけではなく、社会に出てからも大いに役立ちます。現代は、知識が日々革新されて、生涯学び続けることが求められるからです。

